Kounosu Church 鴻巣教会だより　2005年冬号(No.130)別冊
日本キリスト教団鴻巣教会　2005年2月27日発行

立教小学校校長 田中司先生
教育講演会「幼児教育に望むもの－子育てほど楽しいことはない」

幼稚園委員　柏崎　康司

2004 年 9 月 11 日に行われました講演会の２時間にわたる講演録を、遅ればせながらご報告いたします。（個人情報が特定できないように、ぼかして表現している箇所があります。）

１．無気力でない子を育てる環境

第二次世界大戦中に、立教小学校は、アメリカ軍の集中爆撃を受けました。院長であった聖公会の主教は戦後アメリカ軍に抗議したのですが、アメリカ軍から見ると日本の小学校は兵舎に見えたらしく、それで小学校が集中攻撃を受けたようです。日本の小学校では、昔から兵隊の規律・訓練と似た教育がなされていたことが、ここに現れています。

得意な部分を伸ばす教育には、子供の自主性を大切にする環境が必要です。英和幼稚園では、そのための自由な雰囲気が大切にされている様に見受けられます。

２．五感「におい」で育てる。

におい・感じというのは、一般化しにくい情報です。あふれる情報の中で、子供たちが大人になって様々なことができるために必要な情報とは、五感を通して本物から得る「におい」「感じ」という情報です。それには、幼い頃から本物の「におい」「感じ」を感じ取ることによって研ぎ澄まされた感覚が必要です。たとえば、子供は生まれた時に匂いで母親を感じます。母親も匂いで子供を感じます。

ところが、テレビは子供たちの興味をひきつけ、せっかくの感覚を研ぎ澄ます時間を奪ってしまいます。

（子供たちは好奇心のために「うるさい」ものです。うるさくないときは、彼らにとってとても楽しいことをしているときであり、大人たちにとっては大変困ったことをしていることが多いものです。ある寝坊した日曜、普段は礼拝に行くと言って騒いでいる我が家の子供たちが静かにしているで惰眠をむさぼっていましたら、子供たちは数十枚のＬＰレコードを床に敷いてケンケンをしていました。）

ゲームに至っては、本物にふれる前にゲームのシーンを通じてものを感じることに慣れてしまい、本物によってのみ培われる鋭さを獲得することができなくなります。「ゲーム脳」といわれる言葉まで出てきました。

３．自分の能力を伸ばそうとする子供たち

子供は自分の能力を興味の向くままに伸ばそうとします。赤ちゃんが手を伸ばすのは、興味の向くまま届くと思って手を伸ばすのでしょう。しゃべる・歩く能力も興味の向くままに伸ばしていきます。このときの親の接し方は、実に理想的です。遮ることなく環境を整えるのみですね。この接し方は、大きくなっても子供

の能力を伸ばすのに必要な態度です。もちろん、家庭教師などは要らないわけです。このときの親は嫌々ではなく、わくわくしながら喜びを持って一生懸命接しています。

さて、今度は掴むことへ。しかし掴むことは大人にとって都合の悪いことになっていきます。さらに、大きくなっていく子供たちは、興味の向くままに自発的に能力を伸ばそうとします。

そんな子供たちの意思を遮って、別の勉強（たとえば学校の勉強）を強制することがあります。これを続けると、子供たちは楽になるために一切自分の意志を無くすしかありません。

ある親せきの物理学者は、飼い犬を犬の意志とは関係なく変な格好をさせていました。するとその犬は、呼ばれた途端に「どうにでもして下さい」という態度をとるようになりました。強制されるときに一番楽なのは、自分の意志を持たず、無気力に逃げることです。無気力な子は、やろうとしていることを否定され続け、無気力にさせられているのです。個性的な子ほど無気力になります。ついには、自発性を無くし、やりたいことが分からない無気力人間ができあがるわけです。

４．学校教育で必要なこと

ある空手の大家に言わせると、多くの技を知るより一つの技を使いこなせる人が強いそうです。人生で成功している人は、一つのことを徹底的にできる人であるといえます。

英国では、得意な部分を伸ばす教育をしています。ところが、日本の学校は道具を揃えることに熱心で、道具の意味を教えません。ただ、全ての科目についてオール５を取らせるようにしています。しかし、道具を使う意味がわかれば、その道具を磨くようになります。たとえば、数学が得意でない子であっても、好きなことに数学が必要な道具なんだと判ったとき、数学を勉強するようになります。

その子の能力はその子自身が伸ばそうとします。必要なのは、伸ばすための環境づくり・教材づくりです。本来、興味を引いて自発的に能力を伸ばすように、教材を考えるべきでしょう。

５．良い子とは

子どもは、学校のために生きるのではありません。学校は子どもにとって生活の一部にすぎませんから、学校の成績がよいことがその子が成長していることを意味しません。学校の成績で「良い子である」と考えるのでなく、その家において「良い子」とは何かを考えておき、その子のありのままの姿をしっかり見れば、その子が成長しているかどうかはわかります。また、子供が何を必要としているかは、子供をじっと見ていればわかります。

また、子が成長しているとき、決して「目安」（母子手帳の平均値や、学校の成績）に惑わされてはいけません。平均値になっていないので間違っているように感じられることがあるでしょうが、平均値に惑わされてはいけません。

６．我が家の子育て

（１）３番目の男の子

我が家の、女、女、男、女の４人の子は、「お姉ちゃん」「お兄ちゃん」ではなく、互いに名前で呼び合っています。そして、男女別なく育ててきました。しかし、男女の間には明らかに差があります。

三番目の息子は、お姉さんたちにいつもやりこめられてきました。もちろん、いろいろなことを教えてもらったりもし

ていますが…残酷な目に遭いつつ辛い日々を過ごしてきました。
　たとえば、彼は飼い犬に話しかけます…「雨だね・・・。」と。すかさずお姉さんたちに、「人間にしゃべっても誰も相手にしてくれないから、犬にしゃべってる」とやられます。
　そんな彼が小学校２年生の頃に書いた作文は、我が家では父母が勉強を一切見ないので、そのまま学校の文集に掲載されました。
「ぼくには、ねえさんがいます。
ぼくのことをいじめます。
ぼくには、もうひとりねえさんがいます。
ふたりでぼくのことをいじめます。
ぼくには、いもうとがいます。……」
　こう書いてあると、読者の方々は「ははぁ、腹いせに下をいじめるんだな」ということになりますが、実際には
「……みんなでよってたかって　ぼくのことをいじめます…。」
と書いてありました。多くの方が「かわいそうに」と同情しきりでした。
　彼がひらがなとカタカナを覚えたのは、好きな鳥の種類を覚えるためでした。人間、必要とすると何でも自分から勉強するんですね。そんな彼が看板を初めて読めた時、お姉さんたちは褒めようともせず「間違いだ」「間違いだ」というばかり。大げんかになりました。そんなとき、文字も読めない一番下の娘まで口喧嘩に加わっていました。なんて言っていたのでしょう。「うんちべちゃべちゃ、おしっこじゃーじゃー」と繰り返していました。それなりに、末娘も自分の能力を発揮しているわけです。
　女はおしゃべりであり、男はそうではないんですね。

　これに対して、二番目の女の子は、とてもユニークでした。いくつかのエピソードをご紹介します。
　生まれて最初に覚えた言葉が「ぱぱぱ」。何かほしい時にも「ぱぱぱ」。全てのことを「ぱぱぱ」で済ましていました。
　飴を初めて舐めたあとに言った言葉。「飴って唾液でぬらすと甘くなるんだよ」。人間の味覚は水溶液で感じます。
　一緒に育ってきた犬について。「この犬の目を見ていると、彼は何か言いたいのだけれど、ワンワンとしか言えないの。かわいそう。でも、黙っている人は、頭の中でワンワンとしか考えていないのではないかしら。」
　湯川秀樹の中間子発見について。「停電になった時に光っていたのを見てキュリー夫人がラジウムを発見したのだから、ラジウム発見と停電とは関係があるわ。でも中間子のことを発見した時にたまたま停電になったのだから、中間子発見と停電とは関係がないわね。」

（２）結局好きなことが実を結ぶ
　三番目の男の子は、勉強が大嫌いでした。休日は、いつも近所の川へ、みんなの見向きもしないドブネズミや蛇を見に行っていました。我が家では勉強の嫌いな子に、勉強を強制しませんでした。「帰って勉強しなくて良い。授業はよく聞け」と言っておきました。
　彼は、小さい時から絵が好きで良い線の描き方をしていたので「絵が上手だから勉強して絵描きになったら」と言ったところ、二度と描かなくなりました。褒めたり励ましたりしたことが、彼にとって気に入らなかったのかもしれませんし、ほかの友達とは違う変わった人になりたくないと思ったのかもしれません。絵を額に入れようものなら、彼は喜ぶどころか「パパが絵を盗った」と泣き出しまし

た。子の価値観は大人とは違っています。ちなみに高校のクラブ活動選択の際も、アドバイスとは反対の方に行きました。

成績は、小学校から低空飛行のままでした。高校進学は何とか推薦されたものの、大学は二浪しました。二浪目の時、すでに大学生活を楽しみ始めた同期たちに影響され、やっと腰を入れて勉強をし始めて、結局立教大学の心理学部に入学しました。

そして、大学からさらに進学するために、またも２年浪人。次は、生物学へ進学しました。そこで、「じゅういち」という生態のあまり知られていない鳥の研究で、ひたきの巣をいくつも探し当てる能力を発揮しました。今では、その研究室でドクターコースに進んでいます。

（３）食卓を通した心の教育

我が家では、食事の時間は、会話をする時間でもあります。この時に如何に相手の話を聞き、如何に自分を表現するかを学ぶ機会です。

受難週の我が家の食卓で、こんな会話がありました。

一番下の子が塩を振り掛けるのを見て、「雪って、神さまが振り掛けているのかなぁ。」

それを聞いて、その上の子は

「今日、外で雨が降っているのは、イエスさまが十字架に架かって、神さまが悲しがっているからだよね。」

その上の子は

「違うよ。イエスさまが十字架に架かるのは、神さまのご計画なんだから、悲しがってはいない。だから、今日雨が降っていることとイエスさまが十字架に架かったこととは関係がない。」

その上の子は

「でも、十字架に架けてみたら思ったよりむごたらしかったから、涙を流しているのかもしれないよ。」

食事は、礼拝と同じです。そもそも教会の礼拝は食事でした。聖公会の礼拝と同じように、食卓でもろうそくを真ん中にともすと心が落ち着きます。

我が家のテーブルマナーは、娘がボーイフレンドを我が家に連れてくる際に前もって訓練してくるほど厳しいようです。我が家では、テーブルマスターのもと、食事の時には個々の皿に食事を盛りつける形ではなく、テーブルマスターが一つの皿から皆の皿へ盛りつけて分け合う形をとっています。また、食事が終わるまで、テーブルマスターの許可がなければ食卓から立ってはならないことにもしています。背筋も伸ばして座っていなければなりません。

食事のマナーとは、他の人を不快にさせないために、楽しくさせるためにはどうすればよいかと考えさせていることから、スタートしています。英国では、テーブルマナーが厳しいと言われますが、その英国の基礎教育の場をボーディングスクールといいます。テーブルを囲む学校という考え方です。

昨今、落ち着いて授業に参加できない子が多いと聞きます。このようなことを通じてマナーを身につければ、授業などで落ち着きを持つことができるでしょう。

（まとめ、文責：　鴻巣教会　柏崎康司）

日本キリスト教団鴻巣教会　郵便番号　365-0039 埼玉県鴻巣市東 1-1-27
phone048-541-0643　fax 048-541-7758　ホームページ http://www.kounosu.church.jp
英和幼稚園ＨＰ http://www015.upp.so-net.ne.jp/kounosu/eiwa_kindergarten.html